

現象世界に必然偶然と自由とがある その7

「蝶の雑記帳 139」の7

2.6 カントの宇宙論的的理念の体系 まとめ

IV.2 「純粹理性の全アンチノミーに対するむすび」

ここまで第2節でしてきたのは、岩波文庫版『純粹理性批判 中巻』第二部「先驗的弁証論」の、第二篇「純粹理性の弁証的推理について」のうち第二章「純粹理性のアンチノミー」の最終節第九節について、カントの文章をていねいに追いかながら考えることだった。やっと第九節最後の第IV項の細項目にたどりついたが、タイトルからすると、この部分は、第九節の「むすび」というだけでなく、第二部第二篇のうち第二章「純粹理性のアンチノミー」全体についてのしめくくりになっているのだろう。

カントの言っていることを耳をすまして聞かなければならない。比較して短い文章だから、全文を引用しよう。原文はたった一つの段落に圧縮されているが、こんなに込み入った考えを一続きに考えることができるのはカントのような人にしかできない。自分の思考のテンポに合うように切りのいいところで改行して書きとめよう。

(Q1)——我々の理性概念[理念]の対象が、感覚界における条件の[絶対的]全体性とこの全体性に関して理性の要求

を充たすところのものだけであるならば、その限りにおいてこれらの理念は、確かに先驗的理念であり、また宇宙論的理念でもある。しかし我々が、無条件者（これが我々の論究の本来の対象である）を、まったく感覺界の外部にあるもの、換言すれば一切の可能的経験のそとにあるもののなかに置くや否や、理念は超越的なものになるのである。このような超越的理念は、悟性の経験的使用を完結することだけにすら役立つものでない（かかる完結はとうてい実現せられ得ないが、しかしそれにも拘わらずどこまでも追求せられねばならぬ理念である）、むしろかかる理念は、可能的経験からまったく離脱して自分自身を対象とするが、しかし対象の質料は経験から得られるものでなく、またかかる対象の客観的実在性も経験的系列の完結を基礎とするのではなくて、もっぱらア・プリオリな純粹概念に基づくのである。

(Q2)——このような超越的理念の対象は、まったく可想的なものである。そしてかかる可想的対象を先驗的客觀〔物自体〕、即ちそれについては我々がまったく何ごとも知らないような客觀として認めることは許されるにしても、しかしこのような先驗的客觀をその性質に関する明確な述語によって規定されている物として考へるとなると、我々としてはかかる対象を可能ならしめる根拠（一切の経験的概念にまったくかかわりないものとしての）ももたなければ、またかかる対象を規定すべき正当な理由も

ないのである。するとかかる先驗的対象は、ほしいままに案出された恣意物にすぎないということになる。

(Q3)——ところが宇宙論的的理念のうちで、第四アンチノミーを生ぜしめた理念は、このことを敢えてするように我々を促すのである。およそ現象の現実的存在は、その根拠をみずからの中にもつのではないで、常に条件付きのものである、そこで一切の現象から区別されるような物、即ち現象の偶然性がそこで終止するような可想的対象を探ね当てることを我々に要求するわけである。

(Q4)——しかもしも我々が感性の全領域のそとに、それ自体だけで自存する現実的存在というものをほいしままに想定するとしたら、およそ現象は、それ自身知性的存在であるような存在者が可想的対象を表象する偶然的な仕方にすぎない、と見なされればなるまい。すると我々に残されているのは、[経験に基づく]類推だけということになる。つまり我々は、かかる類推に従い経験概念を援用して、可想的な物——換言すれば、それについて我々がいさかの知識ももっていないような物に関して、なんらかの概念を拵えることだけである。我々は偶然的なものを、経験によってしか知ることができない。ところがここで我々は、まったく経験の対象になる筈がないような物を問題にするのである。それだからかかる物に関する知識を、それ自体必然的なものから、即ち物一般の純粹概念から引き出してこなければならない。

(Q5)——こうして我々が、感覚界のそとへ一歩を踏み出すとなると、この一歩によって我々は、かかる新しい知識をまず絶対に必然的な存在者の研究ということから始め、この存在者に関する概念から、まったく可想的な一切のものの概念を導来せねばならなくなる。そこでわれわれは次章でこのことを試みようと思うのである。

これまでもそうしたが、アンダーラインのうち実線部分はわたしにも納得できる文章で、波線のところは、納得の困難な文章でカントが無理を承知で押し出す考えだ、と思う。

この最後の段落は、「純粹理性の全アンチノミーに対するむすび」と題して、一番気がかりな点を短くまとめたものと言える。だが、カントは気がかりな点をそのままにできない人だから、次の第三章「純粹理性の理想」で、「絶対に必然的な存在者」という理想をさらに詳しく考察する。今読んだ段落は、その考察のための“はしがき”と見なせる。

(Q1)の文章中に、「我々の論究の本来の対象が無条件者である」という趣旨の文がある。カントが考えようとしているのは、その全般的な哲学体系に、理性が要求してやまない整然として確固とした形を与えようとしているのだ、とわたしは思う。その体系を支える根拠となりえる無条件者すなわち「絶対に必然的な存在者」を概念として言葉で表現しようとしているのだ、と。カントは、これまでの哲学者たちの考えてきた「哲学」に、カント一流の整然として整った体系を与

えるために、論述を展開しているのだ、と思う。

なぜそうしたのだろうか。カントが構成して見せる哲学体系の頂点に据えられるのは、「絶対に必然的で条件などに拘束されない存在者」である。そのような存在者があれば人間の相対している確実性を欠いたように思える現象世界を支える根拠者となり、人間理性があれこれ考えるすべてのことが完結した形をもつことになるだろう。カントは、その道筋を、形式的なものにすぎないにせよ示したかった、と考えることができる。

しかしカントの文章の細部は、カントがその思惟の道行きを完全なものとは考えていないことを示唆しているようだ。屈曲しながら上昇してきた思惟のところどころで、断定は慎重に避けられている。そして、次の章では、「絶対に必然的で条件などに拘束されない存在者」の実在を想定する理想が不可能だと論証するのである。だからわたしは、「神をこっそりと再登場させる」というニーチェの言い分は誤解だ、と思う。

しかしそれでも、形式的にせよ言葉に出して「絶対に必然的で条件などに拘束されない存在者」を位置づければ、いくぶんなりともその考えを肯定していると見られるのは避けられない。

わたしは、カントが「世界に根拠を付与しようとする」困

難な企てをなぜやる気になったのか、理由を考えてみないではおれない。しかし、実は、カントはそれが不可能なことを、このあと第三章で明瞭に論述している。そのことを後回しにして、「自由」の問題を主題にしたのには理由がある。それは、カントの説きおこすことがわたしには難解で、一行ごとに格闘して読解する必要があったからである。その長い議論を正しく位置づけてカントの最終的な結論を理解することは、たいていの人に困難なのだろう。ニーチェほどの人も、その議論の仕方では「自由や永遠や神をこっそりと再登場させることになる」、と心配しているのである。だからわたしは、力を尽くしてカントの考えを追って、重要だと考える必要があると考えたのである。

カントは、『純粹理性批判』「第二部先驗的弁証論」の第二章の議論のあと、第三章で「世界に根拠を付与しようとすることはできない」ことを、明瞭に言明している。それについては、第3節と第4節で宇宙論的世界と「自由」について考察したうえで、わたしなりの考え方を示すことにしよう。

2025年12月冬至

海蝶 谷川修